

京都橘高校の授業改革のとりくみ

前 芝 憲 一

はじめに

俗に横柄な職業人として、警官・医者・教師が挙げられる。もちろんすべてのものがそうであるわけではないが、これらに共通するのは、それぞれ閉鎖的で他人に頭を下げることを知らないということであろう。つまり、社会的に一定の高さと権力を備えた地位にあつて、それぞれ市民・患者・生徒（保護者）から批判されにくい対象となっている。

教師に限定して言うと、保護者も子どもを「人質」にとられていられるようなもので、余程のことがないと面と向かつては批判しにくい。だからそういう「聖域」ともいえる空間の中で安住していると、自分の姿・振る舞いが見えにくく、端から見ると横柄・グーマンな存在になっていくのであろう。

授業について言えば、教室はまさしく閉ざされた空間であり、そこでどういう授業が展開されているかは、その教師が外に開か

ない限り誰にも分からない。また、自分がどんなにすぐれた授業であると思つていても、それが生徒にどう受けとめられているかわからない。もちろん、授業の中で応答や感想文を書かせたりする中で手応えを掴んではいるが。

以上は、極論で反発もあるかも知れないが、自分自身の内面に傲慢の芽はないか、誠実に謙虚にプロの教師として自己研鑽に励んでいるかを問う必要があるだろう。その時、自己の姿・振る舞いの「断片」を映してくれるのが、授業アンケートであり、公開授業である。以下、本校での授業改革のとりくみを授業アンケートと公開授業を中心にして述べていきたい。

一、小チームでの授業づくり

本校では、各教科とも科目ごとの担当者によつてチームが編成され、授業時間内に打ち合わせ会議が設定されている。たとえば国語では、国Ⅰチームとか国Ⅱチームとかがある。年によつては、

さらにその中に現代文チームと古典チームとを分け細分化している。ただし最近では、学校そのものがAコース（総合進学コース）Bコース（特別進学コース）Cコース（国際教育コース）と細分化されているので、チームを組めない「一人職場」の所もあるが、以下に述べる小チームの基本的な考え方は踏襲され、各コースの特徴を踏まえた授業づくりがなされている。

この小チームでは、まず生徒の生活実態や学習実態が議論される。たとえば、「少子化の中で全体の中で学んでいくというより、個別教育にならされていて、そういう要求が高い傾向がある」とか「真面目で与えられたものはそつなくこなすが、自発性・自主性に欠ける」「雛鳥症候群」的な生徒が多いとか、生徒の実態をまず把握し、それに見合った授業方法や教材を模索していく。

そして、五月連休明けに「シラバス」をより具体化した「年間授業計画」を立てる。これまでは、教科によってその計画を生徒に配ったり配らなかつたりしたが、今年度より全科日配布しそれに基づいて授業を行うことになった。

国語科では、小チームによる「年間授業計画」づくりは二十年前ほど前から実施してきたが、そのねらいは、年間計画を事前に提示することによって教師側が見通しを持った指導が出来ること、また生徒が自発的に学習計画を立てることが出来るということにあった。

その年間計画の中心は、生徒に見合った教材をいかに配列するかである。いうなら生徒の内面に迫り、心を揺り動かす教材をどう

準備するかである。だから、教科書を中心にながらも、投げ込みのプリント教材を使用することになる。たとえば一年生の導入教材は、教科書に収録されていなくても、茨木のり子の「生まれて」である。これは表紙をはじめ、教材のイメージに合うイラスト（沢野ひろし）を鏤めた「オリジナル」のプリント教材。この作品で、「青春の戸口」近くに立っている「生徒に、生まれてきたことの意味や「受身形で与えられた生」をどう主体的に引き受けていくのかといった問を投げかけていく。こういう柱になる教材を配列しながら年間計画を立てている。またその時々教材に見合ったエピソードなども新聞などから発掘し投げ込んでいく。

この学年ごとの計画は、当然三年間の計画の上に立つものである。教科では夏・春の教科研究会で交流・検討している。ただ、私学という性質上、どうしても「進学課題」は外すことの出来ない課題であり、国語でも「評論」の読解が中心になってきている。しかし、それでも単なる読解ではなく、その評論そのものももっている素材の発想や問題提起をどう生徒の身近なものとして捉えさせ考えさせるのかということで腐心している。このように小チームでは、日常的に生徒状況と交流しながら、教材研究や教授方法を深めている。また考查問題も集団で作り上げていく。

集団・年間計画・共通の考查問題と並べると、教師一人一人の個性が失われ非常に窮屈のように感じられるかも知れないが、授業の内容まで束縛されるわけではなく、あくまで大切なのは一人一人の教員の個性であり、指導力量である。教材研究はチームで

行うが、実際の授業では個々の教員の裁量に任されている。

たとえば、国Ⅱ現代文で清岡卓行の「ミロのヴィーナス」を採り上げた時の私のささやかな実践を紹介したい。チーム会議では毎回、生徒の反応や教材の読みの交流をしてきた。その上で、この教材をどう生徒にリアルに実感させるか、それを課題にそれぞれとりにくんだ。今の生徒の多くは感覚的・視覚的思考には長けているが、論理的・抽象的思考には弱い傾向がある。この清岡の「ミロのヴィーナス」を採り上げたのは、これを通じて抽象的思考に慣れていくことが主眼であった。ここでのキーワードは「普遍」と「特殊」である。周知のように、「ミロのヴィーナス」がその両腕を欠落していることよって、特殊な存在から普遍へと飛翔したというのが清岡の卓見である。そしてその両腕の欠落に「多様な可能性の夢」を見ているのであるが、ここでももちろん「特殊」や「普遍」の概念について出来るだけ丁寧に説明を施し、文脈を追うわけだが、それだけでは生徒は実感として理解することとは難しい。そこで、生徒たち一人一人に「ミロのヴィーナス」の両腕の復元図をイメージさせ描かせた。それが次の資料1の図である。

この様々な「ミロのヴィーナス」像、女神・母・芸能者・戦士などのイメージをプリントにして配布。それぞれに注釈・感想を付け加えながら、欠落がいかに多様なものをわれわれに見せてくれるのかということを示しながら、逆にもし両腕が存在すればイメージが固定され、つまり特殊な存在にしかならえなかったとい

うことを押さえながら授業を展開していった。

小チーム会議では、各教材のたびにこういった実践や工夫を交流しながら、授業づくりを進めている。生徒たちが他者の意見や考えを聞きながら自らの考えを深めていくように、教師もこういった場で授業研究を深めているのである。

ただ、授業は教材研究だけで成り立つものではなく、教室空間の中でどうそれを上手く「立体化」しているかが大事である。声が小さくては上手く生徒に伝わらないし、板書が拙くても同様であろう。また教師の一人芝居で終わっては、生徒の意欲や関心を引き出すことはできないだろう。そういったことを掴むための一つの材料として「授業アンケート」がある。そして生徒の捉え方が果たして正当なのかどうか客観的に知るためにも、また自己の弱点を知るためにも「公開授業」が必要となってくる。

二、授業アンケートのとりにくみ

本校では一九九七年からこの授業アンケートにとりにくみできたが、実施に至るまでには大激論があった。アンケート結果がいわゆる「勤務評定」として使われるのではないか。そんなアンケートだけで授業総体を測れるはずがない。生徒がいい加減に答えるのではないか。こういった疑問・不安・反発が渦巻いた。かくいう私も大反対をした一人である。一年間、教科会議・教科主任会議・教職員会議の議論を尽くして、最後は校長判断での実施とな

資料1

2周年組の夕暮

可能性をもった

ヴァイオラスたち



03-23-0
 ...
 ...
 ...
 ...



左向き
 113.13.0.



型
 ...
 ...
 ...



世帯内
 ...
 ...
 ...
 ...



おそれ
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...



...



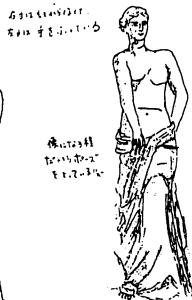
愛する人との別れの見送りのとき



...
 ...
 ...



オマケ
 ...
 ...



...
 ...
 ...



...
 ...
 ...

った。しかし、実際に行う以上はこれを冷やかに傍観者として見ても仕方がないので、少しでも実のあるものにするために項目つくりやその後の活かし方を教科で考えてきた。茨木のり子風に言うならば、「受身形で与えられたもの」をどう主体的に引き受けるかであった。いわば自己研鑽のための一つの契機になるように位置づけたのである。

さて本校の「授業アンケート」は三本立てになっている。一つは、「授業アンケート」(資料2) そのもの。あと各教科担当者への要望などを記す「記述式アンケート」用紙(資料3)と、生徒たちにも自分たちの学習状況を振り返らせるための「学習状況アンケート」(資料4)の三つである。

「授業アンケート」の項目は九項目で以下の通りである。

- 問1 声の大きさは適当ですか。
- 問2 説明の仕方はわかりやすいですか。
- 問3 黒板の書き方はいいねいわかりやすいですか。
- 問4 生徒に対する接し方や注意の仕方は適当ですか。
- 問5 授業の内容や進め方が自分たちの関心や理解力にあっていますか。
- 問6 授業の内容がために、力がつくと思いますか。
- 問7 先生は熱意を持って授業にのぞまれていますか。
- 問8 1時間毎の授業の目標をはっきりさせ、計画的でまとまった授業ですか。
- 問9 授業はチャイム始業、チャイム終業が行われていますか。

生徒はこの9項目について全科目、「1↑ほぼ良い」「2↑良いとはいえないが、不満ではない」「3↑不満である。もう少し改善してほしい」の三段階で評価する。併せて各教科担当への要望などを「記述式アンケート」に書く。両方とも記名になっているが、記述部分は教務で各教科担当者ごとに裁断して渡すことになっている。

アンケートの実施は七月の期末考査の最終日。はじめに学校長よりなぜこのアンケートを実施するか趣旨説明があり、そのあと記入させることになっているが、多くの生徒はその趣旨を受けとめ誠実に回答している。その後教務部でデータ処理を行い、八月半ばには先ほどの記述意見と合わせ、各個人にデータが手渡される。また教務としては、全校・学年・クラス・教科という単位で九七年からの経年変化などの資料を作成し、どの学年・クラスに不満度が高いかなどを分析している。国語科では、夏の研究会の時に、このアンケート結果をどう受けとめ自己分析したのかを各自B5一枚程度にまとめ交流している。たとえば、「板書」のあり方については、生徒の不満が高いからといって一概にそれが授業として改善すべきことなのかどうかは一考を要するところである。丁寧にする方がいいとは限らない場面も多々ある。そういうことも含め自己分析を行うのである。要するに、結果をどう自己分析するのが大切で、一義的な見方を押しつけることは何も生産的なものを産み出さないとと思う。だから、自己分析は時に自己弁明に陥ることもあろうが、それも致し方ないことである。

授業アンケート 1A

2002. 7. 11
京都橘高校 教務部

このアンケートは、授業改善のための資料にします。率直に回答してください。

1年 () 組 () 番 氏名 ()

各担当者の授業について (下の問1～9について次の3段階で回答して下さい。)

- 1 ← ほぼ良い
- 2 ← 良いとはいえないが、不満ではない
- 3 ← 不満である。もう少し改善してほしい

- 問1 声の大きさは適当ですか。
- 問2 説明の仕方はわかりやすいですか。
- 問3 黒板の書き方はていねいでわかりやすいですか。(板書の無い場合は斜線をひくこと)
- 問4 生徒に対する接し方や注意の仕方は適当ですか。
- 問5 授業の内容や進め方が自分たちの関心や理解力にあっていますか。
- 問6 授業の内容がためになり、力がつくと思いますか。
- 問7 先生は熱意を持って授業にのぞまれていますか。
- 問8 1時間毎の授業の目標をはっきりさせ、計画的でまとまった授業ですか。
- 問9 授業はチャイム始業、チャイム終業が行われていますか。

	現文	古典	現社	数学	化学	体育	英 I	EC	音楽	美術	書道	ｺﾝﾍﾞ*	
問1 声													問1
問2 説明													問2
問3 板書													問3
問4 注意													問4
問5 内容													問5
問6 力が													問6
問7 熱意													問7
問8 目標													問8
問9 時間													問9

	表現												
問1 声													問1
問2 説明													問2
問3 板書													問3
問4 注意													問4
問5 内容													問5
問6 力が													問6
問7 熱意													問7
問8 目標													問8
問9 時間													問9

資料3

(2年5・6組用) 各科目に対する意見があれば、下記の所定欄に記入してください。

2年 組 () 番 氏名 ()

現代文・担当者 () 先生

古 典・担当者 () 先生

世界史B・日本史B (選択している方を○で囲む)
担当者 () 先生

数学Ⅱ・担当者 () 先生

生物ⅠB・担当者 () 先生

英語Ⅱ・担当者 () 先生

体 育・担当者 () 先生

保 健・担当者 () 先生

芸術Ⅱ (音楽・美術・書道) 取っているものに○印を
担当者 () 先生

家 庭・担当者 () 先生

古典演習・担当者 () 先生

英語演習・担当者 () 先生

学 習 状 況 アン ケ ー ト

 2002. 7. 11
 京都橋高校 教務部

以下の問はあなたの学習状況についてのものです。それぞれ回答して下さい。

1 年 () 組 () 番 氏名 ()

問 1 あなたは普段、予習をしていますか。該当する番号すべてを○で囲みなさい。

- 1 : 国語 2 : 社会 3 : 数学 4 : 理科 5 : 英語 6 : 保健体育
 7 : 芸術 8 : 家庭 9 : その他 10 : ほとんどしない

○をつけなさい

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

問 2 あなたは普段、復習をしていますか。該当する番号すべてを○で囲みなさい。

- 1 : 国語 2 : 社会 3 : 数学 4 : 理科 5 : 英語 6 : 保健体育
 7 : 芸術 8 : 家庭 9 : その他 10 : ほとんどしない

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

問 3 あなたは出された宿題をどのように行っていますか。

- 1 : 学校ですませてしまう 2 : 家に帰って寝るまでにすませる
 3 : 早朝起きてすませる 4 : 提出直前までかかってすませる
 5 : 期限に遅れて提出している 6 : 出さずじまいである

問 4 あなたは普段、朝の小テストのための学習をしていますか。

- 1 : ほとんどしない 2 : 家で時間をかけてしている
 3 : 登下校の時間を利用してしている 4 : 学校の休み時間等でしている

問 5 朝の小テストはあなたの学力向上に役立っていますか。

- 1 : たいへん役立っている 2 : 役立っている
 3 : あまり役立っていない 4 : ほとんど役立っていない

問 6 あなたは普段、進路実現のため自分だけの特別な学習をしていますか。

- 1 : ほとんどしない 2 : 30分くらい 3 : 1時間くらい
 4 : 2時間くらい 5 : 3時間くらい 6 : 4時間くらい
 7 : 5時間以上

問 7 上記学習の具体的内容は何か。

- 1 : 塾に通っている 2 : 予備校に通っている
 3 : 通信教育(添削)を受けている
 4 : 自分で計画を立てて、問題集や参考書に取り組んでいる
 5 : その他

問 8 宿題、予復習などを含めて一日の家庭学習時間はどのくらいですか。

(「家庭学習時間」には学校での放課後の自学習の時間を含めます)

- 1 : ほとんどしない 2 : 30分くらい 3 : 1時間くらい
 4 : 2時間くらい 5 : 3時間くらい 6 : 4時間くらい
 7 : 5時間以上

という腹の括り方をするのが学校指導部には必要なのである。真摯な教員は謙虚にそれを受けとめているのであるから。

それはさておき、九月はじめの授業では、全教員がこのアンケート結果を踏まえてそれぞれ何らかのコメントを発表することになっている。私についていえば、改善すべきところはできるだけ直すように、しかし、生徒の「甘え」のような要求については厳しい回答を与えている。

国語科では、このアンケート結果を踏まえ、それぞれ自己の課題を見つけ、それをどう改善すればよいかを二学期以降の課題としている。そのため生徒がアンケートに寄せている「声」が実際どうなのかを知るためにも、公開授業を積極的に行っている。

三、公開授業のとらえ

「研究授業」は大上段の構え。余程の気力と気迫がないと出来ないものである。これまでには、たとえば研究授業をビデオ二台で収録し、それを基に外部の講師に分析をしてもらおうという「ストップモーション授業」なども行ってきたが、授業をする方も準備をする方もかなりの労力を費やした。その割に、実践したものは大いに研鑽できるが、なかなかその「教訓」を全体化するのには難しく、だから本校では、「いつでも、どこでも、誰でも」を合い言葉に「公開授業」を気軽にとりくめるように「工夫」してきた。しかし、「公開授業」といっても、身構えるものには違いない。

何が身構えさせるのか。要するに、見られるのが嫌なのである。なぜ見られるのが嫌なのか。理由は様々あるが、極論すれば「批判」「批評」の視線にさらされることを恐れるからである。ある意味それはもつともなことで、大体、相互批判とかいう言語そのものは、それが可能な「共同体」がない限り幻想であろう。それは何らかの権力によつて押しつけられたもので、本当にそこから生産性や建設性などは生まれてこない。だから本校では、授業を見る・見られるの中で重要視したのは、授業の個性を尊重すること、基本的に優れている所を認めること、その上で改善点を指摘しあうことである。要するに、「技の盗み合い」と「改善点の自己発見」の場と位置づけたのである。

「公開授業」は年中いつでもだが、特に年に三回意識的に行う公開授業週間を設けている。一回目は、四月のはじめ。これは新任の非常勤・専任教員を中心にとりくまれている。おもにベテラン教員が彼らの授業を見学し様々なアドバイスをするともに、新任教員がベテランの「技」を学習する機会となっている。二回目は、教育実習生の受け入れ週間。ここでは実習生に専任教員のすべての授業を見に行くことを義務づけている。また実習生の指導のために、専任教員が模擬授業を行ったりしている。三回目は、十月の研究授業を実施する前後の週間。ここでは、おもに授業アンケート結果の改善点のチェックを行ったりしている。

昨年は、新任教員が例年になく多く、公開授業が活発に行われた。私自身で言えば、年間延べ十二人の授業を見に行き、十六

人が見に来た。ただ、学校五日制の中で時間割が非常に窮屈になつており、空き時間を潰して授業を見に行くことは年々困難になつてきている。自分の授業・クラスに来てもらい、そこで代わりに授業をしてもらう「コンバート授業」など、様々な工夫をしているが状況は厳しい。また、以前は授業見学後に簡単な意見交流会を持つたりしていたが、それもこの状況下ではできず、現在は簡単な「コメント用紙」を記入してもらうだけになっている。もっとも小チーム会議があるところは、そこで議論をしている。また国語科では、授業内の教科会議（週1回定例）でできるだけ、各チーム・学年の学習状況や公開授業の様子などを交流するようにしてきた。

おわりに

ここでは、授業アンケートと公開授業を中心に述べてきたが、生徒たちの実態や要求を知るアンケートは他にもたくさん実施されている。たとえば、新入生アンケートや卒業生アンケート。いわば入口と出口調査である。そのほか各教科では、学年末に独自の授業アンケートも実施されている。また、保護者と生徒と教員が様々なテーマ、たとえば授業・制服・五日制・生活指導など、についてフリーに議論できる「三者交流会」などの場もある。これらは、いうなら生徒・保護者の要求を知るとともに、世評のシャワーを浴びながら学校を変革していく一つの契機となるものであ

ろう。

学校五日制・総合的な学習の時間によるカリキュラムのしわ寄せ、新課程での三割削減による学力の低下の回復など、学校現場は様々な矛盾・困難を抱えているが、だからこそ授業のあり方が重要になっている。生徒の意欲・関心を引きだしていく授業。学習の主体性を獲得させていく授業。生きる力、考える力、世の中を見る力、入試を突破できる力、様々な力をつけていく授業が求められている。そういう授業づくりを集団でやっていくようとしているのが本校の様々なとりくみである。

今年度、新入生の授業ははじめ三日間を「オリエンテーション授業」と名付け、英語・国語・数学の特別カリキュラムを組んだ。このねらいは、授業を核とし予習・復習のやり方を具体的に教えることとそれぞれの教科を学ぶことの面白さを伝えることにあった。

また、現行の「授業アンケート」の改革と新たに保護者による「学校アンケート」の導入を検討している。「学校アンケート」はさておき、現行の「授業アンケート」の到達であるが、これで全教員（専任・常勤・非常勤）の授業レベルを揃えてきたと言える。具体的に言うとな全教員の授業でアンケート9項目の「ほぼ良い」の平均値が74%となってきた。まだ「説明の仕方」や「黒板の書き方」などは60%台の後半であるが、一定の達成をみたと言ってもよいだろう。そこで今度は今まで無意識に反復してきた授業そのものを観点別に再構成して、ひとまとまりの授業としてどうであるのかを客観的に分析することができるようなアンケートを模

索している。

その観点とねらいは以下の通りである。

- 1 教科指導力 教科指導の基本に関わる技能を問う項目。授業を成立させる最低限の項目(声・黒板・授業計画)について、それぞれ適切になされているかどうか確認する。
 - 2 授業をつくる力 おもに教科指導の本質を問う項目。授業の枠組みが確保され、その中で生徒に実力を付けたリ、意欲・関心を引きだしているかどうかを確認する。
 - 3 熱心さ 教師の熱意が伝わっているかどうかを問う項目。
 - 4 統率力 授業空間が適切に管理できているかどうかを確認する項目。私語・居眠り・携帯電話などにどう対応しているかを問うもの。
 - 5 個別対応力 授業の理解度の確認と、一人一人の生徒にきちんと目配りができているかどうかを確認する項目。
 - 6 信頼度 授業を通じての生徒の満足度を確認する項目。
- この観点別アンケートによって、より授業の弱点もはつきりしてくるだろうし、秋に実施している公開授業の分析の観点も明確になってくるだろう。先のオリエンテーション授業、そしてこの七月に実施する「授業アンケート・バージョン2」の結果を全教員が相互に学び、刺激しあうことを見通しながら、高校「新指導要領」実施、中学新課程生の入学というこの二〇〇三年度の出発を築いていく計画である。
- 改革は「痛み」をとまなうし、きれいな事ではなかなか進まない。

本校も例外ではない。ただ熱心に議論し誠実に生徒に向き合う教職員の集団がある。一人の生徒の進級をめぐつて十時間に渡り議論する集団がある。私自身は教務専任教員・国語科主任として教育改革を推進していく立場にあり、授業アンケート・公開授業の責任者でもある。いつも学校執行部と現場との間に立ち、時には板挟みになりながら苦悩してきた。しかし、現状に安住しては停滞するだけで、授業も教師としての自己もマンネリに陥るしかないという意識が多くの教員の中にあり、そういう真面目な集団が一連の改革を支えてきたと言えるだろう。

(まえしば・けんいち)

京都橘高校教諭